

〈研究ノート〉

Frantz Fanonと植民地心理

～マルチニークとメキシコの事例から～

角川 雅樹
(東海大学)

(1) はじめに

筆者はさきに、植民地と攻撃性の問題を論じたことがある^{21),24)}。今回はそのいわば続編として、マルチニークの精神科医 Frantz Fanon の思想を手がかりとして、ラテンアメリカにおける植民地心理について考えてみることにしたい。

(2) マルチニーク

さて、Frantz Fanon 自身や Fanon の思想に触れる前に、Fanon が生まれ育ったマルチニーク (Martinique) について、簡単に紹介することにした。

マルチニークは、現在フランスの海外県 Département であり、カリブ海の南東の端、小アンティル諸島に属す小さな島である。南アメリカのベネズエラは目と鼻のさきであり、気候は亜熱帯性で、夏はかなり暑く、他のカリブ海諸国同様ハリケーンの通り道でもある。人口は33万人ほどで、首都は Fort-de-France (人口約10万人) である。人々は Fort と呼んでいるが、ここはその名のとおりかつて要塞のあったところである。

マルチニークは、近年他のカリブ海諸国と同様リゾート地化している面があり、特にフランスの海外県ということで、パリからの便も多く、フランスとは空路で直結している。フランス人は、南仏へ避暑に行くのと同じ感覚でマルチニークへ出かける、といった傾向さえみられる。

さて、マルチニークは1493年コロンブスにより発見されたが、当時のスペイン人にとって、同地はメキシコやペルーの金銀を運ぶガレオン船に水や食料を補給するための中継地、といった意味しかなかった。その後1635年、フランスの探検家 Pierre Belain d'Esnameuc はマルチニークに上陸し、Saint-Pierreの要塞を建設し、それ以後はフランス領として繁栄することになった。そこでは、主にサトウキビの栽培が進められたが、その後、アフリカから多くの黒人奴隷がつれてこられ、強制労働に従事させられた。なお、土着のインディオは1674年にはすでに絶滅していたといわれる。

つまり、マルチニークの植民地化は黒人奴隷を中心として進められ、1848年に奴隷制が廃止されるまでの約200年間、同地の植民地経営は奴隷制のうえに成り立っていたということが出来る。なお、マルチニークがフランスの海外県となったのは、戦後1946年のことである。現在、住民の大半は黒人か、あるいは黒人と白人の混血ムラト（Mulatto）であるが、結局、マルチニーク人の祖先は奴隷であるということができよう。また、主な宗教はカトリックであり、公用語はフランス語である。現在、フランスとの関係は非常に緊密であって、政治、経済、文化等、あらゆる面でフランスに依存している。

(3) Frantz Fanon の思想

さて、Frantz Fanon は1925年にマルチニークで生まれ、1961年にワシントンの病院で死去している。36年という短い生涯であった。なお、その死因は白血病である。

Fanon はリヨン大学で精神医学を専攻し、後にフランス人（白人）と結

婚しているが、Fanon 自身は黒人であった。1953年アルジェリア、ブリダの精神病院に勤務し、その1年後アルジェリア独立戦争が勃発。Fanon はその後、革命家、思想家として、人間解放の思想を説き、しだいに世に知られるようになった。

さて、Fanon の著作は少ないが、すべて日本語に翻訳されている。いちばん有名なのは「黒い皮膚・白い仮面」(“Peau Noire, Masques Blancs”)であるが、この本は1952年に書かれたもので、Fanon 27歳のいわば処女作である。その他、「革命の社会学」(1959年)、「地に呪われた者」(1961年)、「アフリカ革命に向けて」(Fanon の死後1964年に編纂されたもの)がある。また、精神医学関係の論文もあるが、主要な著作は上記の4点である。

Fanon の著書がすべて日本語に訳されているのは、おそらく、60年代、70年代の学園紛争と無関係ではなく、Fanon の暴力(Violence)論が当時の日本人学生にアピールしたからであると思われる。しかし、現代の日本で Fanon はむしろ忘れられた存在となっている観がある。

Fanon が日本で論じられる(られた)のは、主にその暴力論を通じてであるが、筆者はむしろ、Fanon によるマルチニーク人(あるいはアンティール人 [les Antillais] 全般)の植民地心理についての分析に興味を持った。もちろん、暴力と植民地心理は密接に関連しているわけだが、ここでは考察の便宜上両者を切り離して考えることにしたい。

だが、植民地心理に入る前に、ここで Fanon の暴力闘争に関する考え方に触れておくことには、意義があろう。ごく簡単に要約すれば、それは次のようになると思われる。マルチニークにおいては征服・植民地化、奴隷制の導入といった、いわば、<植民地状況>(Situation Coloniale)において暴力はその中心的役割を演じた。つまり、征服・植民地化、奴隷制とは、まさしく暴力によっておこなわれたものであり、暴力以外の何者でもなかった。マルチニーク社会は、言うなればすでに暴力を内包している社会である。

したがって、Fanon の論理では、ヨーロッパ人による征服・植民地化あ

るいは奴隷制がひとつの“Action”であって、マルチニーク人（あるいはアルジェリア人）による解放闘争（武力闘争）は、それに対する“Réaction”にほかならない。それはすでに内包されている暴力的状況を外化することに等しい。つまり、Fanonは黒人の最初の行動は“Action”ではなく、むしろ“Réaction”だと主張するのである。したがって、武力闘争はその意味で正当化されることになる。それは内に蓄えられた暴力、内面化された他者の暴力を、攻撃性（反対暴力）へと反転させることにほかならない。それが、すなわち非植民地化の運動であり解放闘争である、というわけである。

さて、今回、この論点はとりあえず棚あげしておくことにして、以下、植民地心理ということについて Fanon がどのように考えていたか、という点を検討してみたい。

Fanonは植民地における人々の心理について、主に“Peau Noire, Masques Blancs”の中で詳細に論じている。まず、Fanonは“Lactification”ということについて語る。Lactificationは日本語では「乳白化」と訳されているが、これは一言で言えば、マルチニークの人々が、白人あるいは白人文化を志向することである。“Lact”はLaitと同じで、ミルクのことであり、Lactificationというのは、したがって、ミルクのように白くなろうとすることを意味する。

この傾向のもっとも端的なかたちとして、マルチニーク人が少しでも自分の血統を白くしようとするのを、Fanonはとり挙げる。「アンティルの女は誰も彼も、一時の恋の相手に、あるいは結婚の相手にできる限り黒くないものを選ぼうと努める」(p.43)と、Fanonは述べる。また、「ニグロの娘が白人の世界に受け容れられたいと渴望するのは、自分が劣っていると感じるからだ」(p.50)とも言っている。(以後、「黒い皮膚・白い仮面」からの引用は、すべて海老坂氏らの翻訳による。)

Fanonは、マルチニーク人の白人に対する劣等感について分析を進めていく。(なお、アンティル人というのは、アンティル諸島の人々のことをい

うが、マルチニーク人はすなわちアンティル人であって、Fanonの言葉では、両者がほとんど同義語として用いられている。) Fanonは何度もことわっているが、自分が研究対象としているのは、あくまでもアンティル諸島の黒人であって、アフリカの黒人などについて同じことがいえるかどうかはわからないとしている。

Fanonはまた次のように述べる、「アンティル人は自分を黒人とは思っていない。自分をアンティル人とみなしている。ニグロはアフリカに住んでいるのだ。」(p. 100)マルチニーク人では、その劣等感の結果、白人になりたいという欲求が強く、上記のような、自分を少しでも白くしようとする<乳白化の願望>、すなわちLactificationの傾向がみられる。また、マルチニーク人は、自分を黒人とみなしておらず、むしろ白人とみなしている、とFanonは言う。黒人とは、アフリカに住んでいるセネガル人など(Fanonはなぜか特にセネガル人を例として挙げる)であって、マルチニーク人は意識のうえでは白人なのだ、と述べている(p. 100)。

Fanon自身も白人と結婚しているが、Lactificationの端的な例が恋人や結婚相手を選ぶことに表れるにしても、この傾向はもっと広く文化全般においてみられる。それは白人志向、白人文化志向ということであって、具体的には、フランス人、フランス文化の志向である。なぜフランスかということは、すでに述べたように、マルチニークの歴史をみれば明らかであるが、ともかく、フランス志向が顕著にみられることを、Fanonはくりかえし指摘する。

例えば、フランス文化のもっとも基礎的部分は、フランス語であるが、マルチニーク人はできるだけフランスのフランス語を話そうとする。クレオール(Creole)語[フランス語と土着語との混交語]は召使の言葉であり、ちゃんとした家庭ではフランス語を話さなければいけない、という風潮が一般にみられる。「学校で、マルチニークの青年は、方言を軽蔑することを学ぶ。クレオールなまりだというのだ。家庭によってはクレオール語を使うことが禁じられる」(p. 26)とFanonは述べている。また、「アンティ

ル諸島の黒人は、フランス語を自分の国語とすればするだけより一層白人に近くなる」(p. 25)とも言う。マルチニークにおけるフランス語志向は、次のダマの詩(部分)にもよく表現されている。

「おだまり、フランス語を話さなければいけないと言ったでしょ
フランスのフランス語を
フランス人のフランス語を
フランス的なフランス語を」(レオン=G. ダマ)(p. 27)

このようなフランス文化志向は言語的側面に限らない。例えば、しばらくフランスで生活したマルチニーク人は、すっかり変わってもどってくる。Fanonは言う、「『帰朝者』であるということは最初に接してすぐ確認される。彼はフランス語でしか答えないし、しばしばもうクレオール語がわからなくなっている」(p. 29)「診断をくださには1分あればよい。帰朝者が友人にむかって『皆さん方にお目にかかれて大変幸せです。おやまあ、この国は何と暑いのだろう、とても長くは住めませんね』と言うならば、帰ってきたのはヨーロッパ人ということが告げられたわけだ。」(p. 37)

このような例は際限なく挙げることができようが、とにかく、マルチニークの社会においてフランス志向が強いことは十分理解されよう。実際われわれがFort-de-Franceの街に行ってみると、そこは外見的にもフランス国内とあまり変わらない。新聞、雑誌はフランスからのものが山と広げられているし、たいていの物はFabriqué en France、あるいはImprimé en Franceである。(マルチニークはフランス領であるため、基本的にはフランス以外の国と直接交易することができない。)

さて、マルチニーク人が自分を白人とみなしているということはすでに述べた。Fanonはそれについて次のように言う、「セネガル人ではないかと疑われて不快に思うアンティル人を私はかつて知っていたし、いまなおそういう人間を知っている。というのも、アンティル人はアフリカの黒人に比べて、より『開化』しているからだ。アンティル人はより白人に近い……」(p. 30)また、それに続けてこう述べる、「最近、私はあるマルチニークの

男と話したが、彼はグアドループ人のあるものが、われわれと同じアンティル人になりすましているということを、かんかんになって私に教えてくれた。しかし、と彼はつけ加えた。違いはすぐにわかるさ、奴らはずっと野蛮なんだから。アンティル人よりも白人から遠い、という意味にこれを理解していただきたい。」(p. 30)

グアドループ (Guadeloupe) とは、マルチニークの隣の隣の島であり、ここもマルチニークと同じフランス領であって、フランスの海外県である。すなわち、マルチニーク人は自分をアフリカの黒人と比較し、それより白人に近く、したがって、優れていると考えるだけでなく、ほとんど隣人といってもよいグアドループ人に対しても、自分はより白人に近いという意識、あるいは対抗意識を持っているというわけである。

このような傾向は、マルチニーク人の劣等感を如実に示しているということができようが、Alfred Adler の弟子であり、劣等感について広く研究した Oliver Brachfeld はこれを「微小差異の法則」(Law of Little Difference) と呼んでいる (p. 244)。すなわち、二者間の差が小さければ小さいほど対抗意識が強くなり、したがって、その相手と自分を比較する結果、両者間の葛藤は激しくなるということである。例えば、ピアノの上手な子供は同じクラス、あるいは同じ学校のピアノが上手な子と自分を比較し、対抗意識を持ちやすいが、世界的なピアニストと自分を比較して悩むことはない。あるいは、西洋史上、同じセム族に属すアラブ人とユダヤ人は血統的にもっとも近い関係にあり、共通の風俗習慣を持つにもかかわらず、あるいは、それ故にお互いに対する憎悪が激しくつねに戦争が絶えない、などのことがある。Fanon は言う、「ニグロとは比較社会である」(p. 131)あるいは「アンティル社会は神経症的社会であり、＜比較＞社会なのである。」(p. 132)

さて、マルチニーク人が自分を白人とみなしているという傾向について、Fanon は漫画や挿絵入の本、すなわち、子供の絵本の果たしている役割が大きいと述べている。マルチニークにある子供の絵本はその大半がフラン

スで作られたものである。例えば、ターザンの物語を子供が見ているとして、そこに登場するのは、ターザンとその敵、黒人である。必然的に、子供たちはターザンに自分を同一化し、黒人はやっつけられるべき存在だという考え方が身につけてしまう。このような心理的過程は、子供のなかでいく度もうくり返されていく。そして、そのことはマルチニーク人が白人に同一化し、黒人であるアフリカ人や、また、自分の競争者としての、グアドループ人を忌避する傾向にもつながっていく。

マルチニーク人は、したがって、フランスやヨーロッパに留学したり、仕事で滞在したりする時、愕然とすることになる。マルチニークに住んでいるかぎり問題はないが、いったん外に出て、白人文化のなかに行くと、マルチニーク人はそこで自分が黒人であることにいやおうなく気づかされる。それは、カルチュア・ショックなどという、生やさしいものではないであろう。

Fanon は、マルチニークを神経症的な社会と規定しているが、それについて、次のようにも言う。「われわれにとって、ニグロを賛美するものは、ニグロを嫌悪するものと同じく、『病むもの』である。逆に、自分の血統を白くしようと望む黒人は、白人への憎悪を説く黒人と同じく哀れむべき人間である。」(p. 20) Fanon にとって白人志向じたいが“Malade” (病的) であり、それはマルチニーク人の劣等感と不可分の関係にある。そして、その劣等感が、征服・植民地化、奴隷制という、マルチニーク人の歴史と関係があることは否定しえない。

さて、以上のような Lactification の傾向がマルチニーク人に広くみられることはわかるが、事はそこで終わってしまうほど単純ではない。その次の段階として Lactification に対するいわば反動が出てくることになるが、Fanon はそれを“Négritude”として位置づける。

Négritude とは、一言でいえば、黒人志向ということである。それは自らのなかにある黒人性、黒人文化、ひいてはアフリカ文化の再評価ということである。自分を黒い皮膚の持ち主としてむしろ確認し、そこに Identity

を見出そうとする、いわば *Identité Noire* 探究の試みである。マルチニーク人には、自分の *Négritude*(黒人性)を賞揚し、白人文化の拒否によって、黒人の価値、黒人の文化、黒人性の優位を示そうとする傾向がみられるのである。

Lactification と *Négritude* は、一見、相矛盾する2つの傾向のように見える。しかし、これはいわば同じ楕の両面ということができる。このアンビバレントな心理状態は同時にみられることもあるし、また、時期的に交互に現れることも少なくない。Fanon 自身も若い頃、白人志向が自分のなかにあったことを認めているし、また、後に自分が *Négritude* 的立場に固執していたことも告白している。

Fanon は後にサルトルと出会い、「黒いオルフェ」によって、*Négritude* に救いを求めることはできない、ということを知った。Fanon はしだいに、*Négritude* が必ずしもマルチニーク人としての Identity を確立することにはならない、ということに気づく。「われわれにとってニグロを賛美するものは、ニグロを嫌悪するものと同じく、『病むもの』である。逆に、自分の血統を白くしようと望む黒人は、白人への憎悪を説く黒人と同じく哀れむべき人間である。」(p. 20)

すなわち、Fanon は、自分自身が白人志向と黒人志向のあいだで揺れ動くという体験を通じて、自らそれを分析しながら、いずれの場合も“Malade”(病的)である、という結論に到達するのである。白人に同化しようとするいわば自己疎外 (Auto-aliénation) を告発しながら、同時に、黒い皮膚にこだわり、それに価値を賦与しようとする、これも一種の自己疎外に警告を発したのである。(なお、*Négritude* はすでに述べた暴力論とも軌を一にするものである。それは、*Négritude* をいわば<過度な自己主張>という Aggression の一形態とみなすことができるからである。)

Fanon は言う、「この本は臨床研究である。ここに自分の姿を認めるものは、すでに一步前進しているのだと思う」(p. 22)と。Fanon は、黒人、すなわちアンティル人であるマルチニーク人を解放するためには、まず、自

らの心理、劣等感によって大きく揺れ動いている自分自身から解放する必要があることを説いたのである。

(4) ラテンアメリカにおける植民地心理

さて、以上、マルチニーク人の心理を植民地心理(Mentalité Coloniale)という視点から、主に Frantz Fanon の思想を通じてみてきた。上記のような傾向は、黒人としてのマルチニーク人に固有のものではなく、実はラテンアメリカの多くの国々において、大なり小なりみられるものである。

例えば、かつてイギリス領であり、その後独立したジャマイカ(Jamaica)においても同様の傾向がみられ、特にジャマイカでは、「ラスタファリ」(Ras Tafari) 運動というものがある。“Ras Tafari”とは、故エチオピア皇帝 Haile Selassie のことであるが、この運動はジャマイカ人 Marcus Garvey の思想に依拠する一種の民間信仰である。なお、Garvey は、1920年代にアメリカで黒人のアフリカ帰還運動を提唱した人である。Haile Selassie は、1975年に没しているが、多くの熱狂的な Rastafarian にとっては、その後も「生き神」として存在し続けている。このジャマイカ人のラスタファリ運動も、マルチニーク人の Négritude 的傾向と同根のものであると考えられる。

また、プエルトリコ (Puerto Rico) については、さきにプエルトリコ人の攻撃性について述べたことがあるが、この攻撃性もやはり植民地心理の一面を表しており、また、Fanon の暴力論ともつながるものである。しかし、その一方で、プエルトリコでは“Puertorriqueño Dócil”ということもいわれる。“Dócil”というのは「従順」ということであるが、プエルトリコ人の並はずれた従順さも、やはり植民地心理の一部であるとみなすことが可能であろう。

これらのことについては、また、別の機会に述べることとして、今回は、単にラテンアメリカのカリブ海地域に限ってみても、確かに植民地心理と

いうものが存在し、それはその住民が経験してきた征服・植民地化、奴隷制という状況 (Situation Coloniale) と無関係ではない、ということを描き出すにとどめたい。

(5) メキシコ人の心理について

さて、次に、ラテンアメリカの一国であるメキシコについて、そこにおける人々の心理的傾向を、マルチニークの事例と関連させ、植民地心理という視点から論じてみることにしたい。

メキシコ人の心理について語る場合も、その歴史を検討することは不可欠であるが、メキシコの歴史については、マルチニークよりまだ知られているほうであろう。しかし、ここでその概略を述べるならば、以下のようになろう。特に、その対外関係の歴史をみることは、メキシコ人の民族としての特徴を知るうえで重要なことであると思われる。

メキシコは、コロンブスによるアメリカ大陸発見後、1521年にスペイン人 Hernán Cortés により征服されたが、当時、メキシコにはアステカ王国という一種の軍事国家が繁栄していた。征服後、スペイン人はアステカ文化の徹底的な破壊と、ヨーロッパ文化の移植に努めたが、その結果、メキシコでは混血に混血が重ねられ、1821年にスペインから独立するまでの300年間、主に大土地所有に基づくスペインの植民地体制のなかに組み込まれていった。

混血はメスティソ (Mestizo) と呼ばれるが、現代メキシコ人の大半はメスティソである。すなわち、征服・植民地化により、メスティソ、つまりメキシコ人が誕生したといえる。なお、メキシコでは他のラテンアメリカ諸国と異なり、奴隷制は導入されず、初期にはインディオが半奴隷的な身分で、強制労働に従事させられた。

300年間の植民地時代を通じて、征服者 (Conquistador) と被征服者 (Conquistado) という関係は、ますます強固なものとなっていった。征服

後、アステカの寺院や学校、その他公共の建築物はことごとく破壊されたが、これらの行為を歴史学者であり精神分析学者でもある Marvin Goldwert は、ヨーロッパ人によるインディオ文化のレイプ (Rape) であると位置づけている (p. 1)。確かに、「征服」(Conquista) という言葉は、「女性を征服する (Conquistar)」などと、比喩的に用いられることもあるわけで、これも、それほど突飛な発想とはいえないであろう。実際、征服・植民地時代は、メキシコ人女性 (当初はアステカ女性) が、スペイン人男性によりレイプされることから始まった、といっても決して過言ではないのである。

このように、征服・植民地時代がメキシコ人にとって、一種の外傷体験となったことは否定しえないが、独立後、メキシコは 1846 年より 1848 年にかけてアメリカ合衆国と領土争いで戦争をすることになり、その結果、現在の国土と同じくらいの領域を失う。この戦争がメキシコ人の対米意識に与えた影響には、計りしれないものがある。

また、1862 年より 1867 年にかけて、メキシコはフランスの内政干渉を受けることになる。ナポレオン三世は、メキシコ内政の乱れに乗じて、ハプスブルグ家のマクシミリアン大公をメキシコの皇帝として送り込み、その間のメキシコはいわゆるカイライ政権によって支配されることになる。

20 世紀に入ると、メキシコのみならず、ラテンアメリカ全体がより大規模にアメリカ合衆国の政治的、経済的影響下に置かれるわけであるが、「メキシコの不幸は、神からもっとも遠く、アメリカにもっとも近いことだ」などと、メキシコ人につぶやかせることとなった。

メキシコの対外関係の歴史は、このように、スペイン、フランス、アメリカという強大な国々の影響下に置かれ、征服者と被征服者、支配者と被支配者という関係が、しだいに明確になっていった歴史でもある。

メキシコの著名な哲学者 Samuel Ramos は、メキシコ人には劣等感があり、それがメキシコ人の物の考え方や行動様式に大きく影響している、ということを指摘した。Ramos は次のように言う、「メキシコ人の性格を形成

している特徴のすべては、劣等感に対する反動の産物である。それは経済的に劣っているとか、知的に、あるいは社会的に劣っているということからくるのではない。疑いもなく、それは自分がメキシコ人であるという事実に由来するものである。」(p. 62)

さて、Erich Frommはメキシコに10年以上にわたって住み、メキシコ人を人類学的視点から心理学的方法を用いて研究した。Frommによれば、メキシコは一見父親中心(Patriarchal)の社会であるように見えるが、実は母親中心(Matriarchal)の社会であって、そこでは、男性による強迫的な男性性追及(Machismoと呼ばれる)が顕著にみられ、その一方で、母親あるいは女性一般に対する男性の依存傾向がみられる、ということを描している(p. 111)。

また、精神分析学者であるAniceto Aramoniは、男性性を追及し、時に暴力に走るメキシコ人男性(Machista)と、自己犠牲(Abnegación)を理想とし、完全な従属と自己放棄を美德とするメキシコ人女性の関係は、ある意味で調和を保っており、それを「特殊メキシコ的な解決」(“Uniquely Mexican Answer”)(p. 105)と呼んでいる。E. FrommやA. Aramoniが論ずるメキシコ人のマチスモという一種のAggressiveな傾向は、本論のテーマとも関連するが、このようなメキシコ人の心理全般については、筆者が別の機会に詳述したことがあるので、文献^{20),21),26)}を参照されたい。

さて、以上のような、メキシコ人の歴史心理的背景から、メキシコ人にとって、民族として、つまりマクロにみた場合、どのような社会的傾向がみられるか、ということをも以下問題にしたい。Samuel Ramosは、メキシコ人のヨーロッパ志向について、次のように述べる。「この国では、ヨーロッパ文明の模倣がおこなわれる。そうすることによって、メキシコ人は自分の価値がヨーロッパ人のそれに等しいと感ずることができるからである。模倣をするメキシコ人は、それぞれの場所で特権者的立場に立つことによって、ヨーロッパ文明の域外にある他のメキシコ人に対しては、優越感を覚えることができるのである。」(p. 53)

そして、Ramosはこの傾向を“Mimetismo”（ミメティスモ）と呼んだ。また、精神分析学者の Santiago Ramírez は次のように言う。「メキシコ社会のフランス化がなされることとなり、フランス文学やフランスの音楽などフランス的なものが尊重されるようになった。土着的なものはいっさいが軽蔑の対象となり、異質な外来のものに憧れるあまり、土着の自分たち本来のものが否定されることになったのである。」(p. 70)

このような傾向は、ヨーロッパのみならず、20世紀に至っては、アメリカに対してもみられるようになった。盲目的な無批判の欧米文化崇拜がしだいに顕著なものとなるにつれ、一方で、それに対する反動も表面化してくる。欧米文化崇拜に対しては、“Malinchismo”（マリンチスモ）という言葉が、非難の意味を込めて浴びせられるようになったが、Malincheとは征服者 Hernán Cortés の愛人であり、また通訳としても活躍した、メキシコ土着の女性である。すなわち、Malinchismo という言葉は、外来文化の模倣という一種の裏切り行為に対して浴びせられたのである。このような外来文化の過度な模倣、崇拜に対しては、しだいに“Indigenismo”（インディヘニスモ）[Indígena は土着という意味]という、民族主義的傾向が表面化するようになった。

壁画運動と呼ばれる一連のキャンペーンにより、メキシコの公共建築物の壁面には、リベラ、オロスコ、シケイロスといった著名な画家が絵を描き続けたが、そのテーマにはつねに土着的なものが中心にすえられ、メキシコ土着の文化を強調するのが通例であった。

これら、土着的なものを前面にうち出していくという傾向や、またその運動は Indigenismo といわれるわけだが、それは前述の Mimetismo に対するひとつの Reacción とみなすことが可能であろう。この両者は一見相矛盾するかのごとく見えるが、実は、根は同じところにあり、いずれも欧米人、欧米文化に対する劣等感を契機として出てきたものである。それは個人的なレベルで言えば、つまりミクロの視点からすれば、欧米文化に対する<憧れ>と、それとアンビバレントな関係にある<気負い>あるい

は<強がり>との、いわば相剋であると言うこともできる。

Mimetismo あるいは<憧れ>から、メキシコ人は外来文化の模倣、摂取をおこないそれを身につけることで、自分の価値が一段高まった、と考えることができる。一方、Indigenismo あるいは<強がり>によって、自分に本来固有の土着的なものを強調していくなかで、メキシコ人は、自分自身の価値は元来高いのだ、と考えることができるわけである。しかし、両者いずれの場合にあっても、現状に対する不満、言い換えれば、劣等感がまず存在し、それに対して何らかの償い、すなわち<補償>(compensación)をおこなう必要に迫られたメキシコ人の姿を、そこに見出すことができるであろう。

いずれにしても、その思考の中心は、メキシコ人の外に置かれているのであって、他者を意識することによって、自らのオリエンテーションをおこなっていくという、自己疎外ともいうべき状況がそこにみられるのである。

メキシコの著名な思想家 Octavio Paz は、以下のように述べている。「メキシコの歴史は、自分の存在理由、自己の起源を探究する人たちの歴史である。時にはスペイン人になり、あるいはフランス人になり、また時には土着化し、あるいはアメリカナイズし、メキシコ人は時々夜空にきらめくあのスイ星のように、その歴史の中をさまよい続けてきたのである。」(p. 18)

(6) 植民地的心理とは

以上、マルチニークとメキシコの例を検討することによって、ラテンアメリカにおける人々の心理を、植民地心理として位置づけ、理解しようと努めてきた。

マルチニークでは、Lactification という白人志向がみられると同時に、あるいはそれと前後して、Négritude という黒人志向が現れることを、

Frantz Fanon の思想を基点として考察してきた。そして、この両者はアンビバレントな関係にあり、Fanon の言葉ではいずれも“Malade”であって、自己疎外の状況にほかならないということであった。

一方、メキシコにおいては、Samuel Ramos らの見解を参考として、メキシコ人の心理的傾向についてみてきたわけである。そこでは、Mimetismo という欧米文化の模倣、崇拜といった傾向が指摘される一方で、Indigenismo という民族主義的傾向が社会的にみられる。そして、この両者は一見相矛盾するかのように見えるが、その根は同じところにあり、いずれもメキシコ人の劣等感を契機として表面化してきたものにほかならない。

マルチニークとメキシコでは、このように欧米文化に対する劣等感とその補償という点で、類似したところがあるといえよう。もっともマルチニークでは奴隷制がしかれ、アフリカより黒人奴隷がつれてこられたが、メキシコではそのようなことはなく、植民地体制はむしろインディオやメスティソを中心として進められた、という歴史的違いはある。

しかし、いわば、抑圧された歴史、被支配者としての歴史という点で、両者はひとつの共通項を持っており、奴隷制の有無はむしろ抑圧の程度の違いとして考えることが可能であろう。このことは、実は、日本人について検討する場合にも関連してくるが、筆者はすでに日本人に関して同じ視点から論じたことがある^{20),25)}。しかし、今回の論点をふまえ、次の機会により包括的なかたちで考察したいと考えている。

植民地体制とは、暴力による、支配・被支配という関係の強制である。したがって、植民地心理は、このような対人関係、あるいは対外関係と不可分に結びついているといえることができる。そして、そのような植民地的対人関係は、ある意味で、非常に不安定な関係である。そこにおける人々のなかに、すでに述べたような不安定感、Fanon の言葉で言えば、“Incertitude Certaine”，あるいは、Melville Herskovits が述べている“Emotional Instability”がみられることは、実際、無理からぬことであるといえよう。

(7) おわりに

さきごろ(1990年1月), NHKで, ミクロネシア連邦が1986年独立し, 世界でもっとも新しい国となったということで, その初代駐日大使のインタビューがおこなわれていた。そのなかで大使が「私たちは400年間ずっと『捕虜』でした」と語ったことが, 筆者の印象に強く残っている。「捕虜」の原語は“Hostages”であったが, いずれにしても, そのような感覚が植民地社会の人々にみられることを, われわれ日本人としても謙虚に受けとめねばならないであろう。

参考文献

- 1) Adelaide J : Les antilles françaises, Bordas, Paris, 1971.
- 2) Aramoni A : Psicoanálisis de la dinámica de un pueblo. B. Costa-Amic Editor, México, 1965.
- 3) Blanc-Pattin C : La Martinique, Editions Photoguy, France, 1988.
- 4) Brachfeld O : Los sentimientos de inferioridad, Editorial Luis Miracle, S. A., Barcelona, 1970.
- 5) Dacy E : L'actualité de Frantz Fanon. Editions Karthala, Paris, 1986.
- 6) Darsieres J : Un revolucionario llamado Frantz Fanon. El Caribe Contemporáneo Num. 8, UNAM, México, 1984.
- 7) 海老坂武 : 「フランツ・ファノン」, 人類の知的遺産 78, 講談社, 1981.
- 8) Fanon F : Peau noire, masques blancs. Editions du Seuil, Paris, 1952.
- 9) Fanon F : Los condenados de la tierra. Fonde de Cultura Económica, México, 1963.
- 10) Fanon F : Por la revolución africana. Fonde de Cultura Económica, México, 1965.
- 11) Fanon F : Racismo y cultura. El Caribe Contemporáneo Num. 8, UNAM, México, 1984.
- 12) ファノン, フランツ, 海老坂武, 加藤晴久訳 : 「黒い皮膚・白い仮面」 フランツ・ファノン著作集 I, みすず書房, 1970.
- 13) Fromm E, Maccoby M : Social Character in a Mexican Village, Prentice-Hall Inc. New Jersey, 1970.

- 14) Goldwert M : *Machismo and conquest ; the case of Mexico.* University Press of America, 1983.
- 15) Herskovits M : *Acculturation ; the study of culture contact,* Peter Smith, 1958.
- 16) Mbom C : *Frantz Fanon aujourd'hui et demain.* Editions Fernand Nathan, Paris, 1985.
- 17) Paz O : *El laberinto de la soledad.* Fondo de Cultura Económica, México, 1959.
- 18) Romas S : *El perfil del hombre y la cultura en México.* Espasa-Calpe Mexicana, S. A., México, 1951.
- 19) Ramírez S : *El mexicano ; psicología de sus motivaciones.* Editorial Pax-Mexicano, S. A., México, 1959.
- 20) 角川雅樹 : 「メキシコと日本の知識人の対欧米態度」季刊人類学 12-2, 講談社, 1981。
- 21) 角川雅樹 : [マチスモと母親依存], 国本伊代, 乗浩子編「ラテンアメリカ 社会と女性」, 新評論, 1985。
- 22) 角川雅樹 : [メキシコにおける家族]「ラテンアメリカの家族構造と機能に関する研究」p. 180, 日本総合研究所, 1989。
- 23) 角川雅樹 : [プエルトリコにおける家族]「ラテンアメリカの家族構造と機能に関する研究」p. 259, 日本総合研究所, 1989。
- 24) 角川雅樹 : 「Puerto Rican Syndrome と Espiritismo ~ 植民地と攻撃性の問題から」精神医学 31 ; 773, 医学書院, 1989。
- 25) 角川雅樹 : 「日本人と劣等感」東海大学保健管理センター年報, 第 19 号, 1989。
- 26) Tsunokawa M : *La actitud de los intelectuales mexicanos y japoneses hacia las culturas europea y norteamericana.* Homines 12 Num. 1 & 2, p. 72, Puerto Rico, 1989.